

## カリスマ刷新運動

ブラジルでは90年代後半以降、停滞しはじめたかのように見られていたカトリック界に新風が吹き始めた。「神父のポップスター」と呼ばれる若き聖職者たちが登場したからである。この流行の火付け役となったのは、元体育教師のマルセロ・ホッシン神父。彼は1994年に神父に叙されて以来、「歌って踊れる楽しいミサ」を精力的に主宰してきた。例えば彼の「主のエアロビクス (Aeróbica do Senhor)」は幅広い世代に受け入れられ、マルセロ神父はさながら売れっ子の「アイドル」として、テレビのパラエティー番組にも登場した。カトリック教会系のテレビ局「ヘジ・ヴィダ (Rede Vida)」では、彼が率いるテルソ・ビザンチン教会のミサの様子がブラジル全国に生中継される。週に2回、午前と午後に行われるミサはそれぞれ4千から1万人程度の信者で賑わう。彼の登場以来ブラジルのカトリック教会は非常に活性化し、彼が担当するサンパウロ・サントアマロ司教区では教区教会が38から68に増加して、神学生の数も5人から115人に増えたという。

マルセロ神父は、1998年にサンパウロ市南部の教区教会 (Paróquia N. S. do Perpétuo Socorro) の担当神父に任ぜられた。彼の活動によって信者が増え、教会に人が入りきれなくなったため、近くの閉鎖されていた工場を巨大な臨時礼拝場として借り受け、テルソビザンチン教会と命名してミサを行うようになった。大通りに面した元工場の入り口に立てられた大きな十字架が、かろうじて教会の面目を保っているようだが、むき出しの鉄筋が天井に張り巡らされた「礼拝場」は、いわゆる厳かなカトリック教会の伝統的な雰囲気を感じさせない。

彼のこうしたミサのスタイルや受容者のことをブラジルの人々は「カリスマチコ」と呼ぶ。この運動は、1967年のアメリカ、ピッツバーグに集まったプロテスタントとカトリックの大学生たちによる聖霊のバプテスマを授かる集会が発端となった。正式名称は「カトリック・カリスマ刷新運動 (Renovação Carismática Católica)」である。ブラジルには1969年、サンパウロ近郊の町カンピーナスにハロウド神父 (Pe. Haroldo Rahm) とエドアルド神父 (Pe. Eduardo Dougherty) によって伝えられた。彼らは共にイエズス会神父であり、エドアルド神父はカリスマ刷新運動の特徴の一つである「聖霊のバプテスマ」をミシガンで授かったという経緯を持つ。

## 俗人の活動「祈りのグループ」

キリスト教では神の構造と働きを「父なる神・子としてのイエス・聖霊」の三位一体として理解する。カリスマ刷新運動では、このうちの「聖霊」が信者に直接的に働きかけることで「聖霊のバプテスマ」という体験が得られるとする。聖霊に満たされるという体験を得たものは、誰にも理解不能な「異言」を語る能力(カリスマ)が与えられるようになる。こうした霊的体験は、集会を支える「祈りのグループ」と呼ばれる小集団の体験談でしばしば確認できる。

ここで、この「祈りのグループ」が俗人によって運営されていることに注目したい。草の根レベルの民衆の運動が硬直的な教会権威に脅威を与えるほどの力を持っているとさえみられるからである。たとえば、筆者が調査のために通ったレシーフェ市エンジェーニョ・ド・メイオにあるカトリック教会の「祈り

のグループ」も1998年に個人のイニシアティブによって始められ、1999年には週に一度4,000人から5,000人規模の集会が開催されている。開始当初には僅か30人ほどだったというから、その急速な進展が理解できる。

この教会でも、神父にはマルセロ神父のようなミサを主宰して歌って踊り、信者らと「遊ぶ」という資質が期待されている。70歳を過ぎたレシーフェ市のアベラウド神父も、舞台の上では聖歌を歌い、信者と共に「主のエアロビクス」を踊り、多くの人々を惹き付けていた。とはいえ、このように親しみやすさを感じさせる神父のタレントがカリスマ刷新運動を盛り上げているわけではない。むしろ、一般信者の小規模で地道なイニシアティブが「グループ」活動として広がり、大きな運動の渦になっている点に注目すべきだろう。従来の地味で静粛なミサのパターンに辟易しながら、今日急速に伸びているプロテスタント教会の集会のような賑やかで開放的、そして自由に表現できる場を求めていたカトリック信者が、大挙してカリスマ刷新運動に流れていったということがこのブーム開花の最大の理由なのである。

実はこの運動は、ブラジルに移植されて以来、すぐさま同国カトリック教会のお墨付きを得たわけではなかった。俗人による運動は教会からの分離を生みやすく、事実そのような事例も確認されたからである。ブラジルでは「カトリック離れ」が1980年代から始まったが、ブラジル司教会議がそれを阻止する切り札としてこの運動を公認したのは1994年になってからのことだった<sup>(1)</sup>。

## カリスマ刷新運動を受容する人々

さて、ブラジルの宗教社会学者ヴェラスケスは、カリスマ刷新運動が未だ黎明期にあった1976年、この運動にかんする全国規模の実態調査を行った。「祈りのグループ」に質問紙が郵送され、47都市から1,868人分の回答が寄せられた。質問紙に回答した人のほとんどは、グループのリーダーかそれに準じる者だった。その結果によれば、メンバーの約70%が女性で、年齢層は30から40歳代が一番多く、就学レベルは高卒以上が全体の半数を上回っているということだった。回答を寄せた人々の半数以上は中産階級かそれ以上の人々に占められていたという。

先述したように、この運動が生まれた背景にプロテスタント教会との接触があり、両者ともに聖霊のバプテスマを強調するのだが、それらの共通性をここで指摘しておこう。カリスマ刷新運動の信者はプロテスタント教会のペンテコステ派の信者と同じように多くが低所得者層に属しているという調査結果がある。レシーフェ市のアベラウド神父も、集会に参加している人々の多くが貧困層で、高学歴の者は少ないという。筆者がインタビューした「祈りのグループ」を取り仕切る3人のリーダーは、大学卒と大学生だったが、彼らもグループの参加者は低所得者層で低学歴だと答えていた。以上、今日のカリスマ刷新運動の活動を担っている人びとは、活動を企画・運営する者の多くに高学歴者が多いが、大多数の参加者は中産層かそれ以下の人々の割合が高いという特徴がある。

(1) 詳しくは、山田政信「カリスマ刷新運動—プロテスタントの伸展に抗うブラジル・カトリック教会」『ラテンアメリカ・カリブ研究』第15号、37～46ページ、2008年、を参照。